

What is science? The word is usually used to mean one of the three things, or a mixture of them. Science sometimes refers to a special method of finding things out. Sometimes it means a body of knowledge arising from discoveries. Finally, it is used to represent all the new capabilities and methods that emerge from those discoveries. This last domain is usually called technology. But if you look at the science section of newspapers and magazines, you will find that advances in theoretical research and their practical application receive just about equal attention.

This is not surprising, for the most obvious characteristic of science is its usefulness, the power it gives us to do things. One dramatic example is the Industrial Revolution, which would surely have been impossible without the development of science. The human capacity to control disease, to produce quantities of food adequate for the world's greatly expanded population, and to achieve full production without resorting to slave labor reflects the development of technological know-how.

Now this power to do things carries with it no instructions on how to use it, either for good or for evil. Such is determined solely by how inventions are used and by our own priorities. Here most of us understandably have ambivalent feelings.

パッセージ全体はけっして難しとはいえない、慶応・理工の出題だが、この下線部を日本語に訳せと言われたとき、自信を持って解答できる受験生がはたしているだろうか。問題は the power it gives us to do things の解釈である。

少し精読力のある受験生なら、its usefulness と the power it gives us to do things が言い換え (同格) であることは直ぐに掴めるだろうが、わずか 8 語の the power it gives us to do things の正確な理解は見かけよりもはるかに難しい。

考えられる読み方を整理してみる。

the power (which) it gives us ... と読むのは当然だが、(which) it gives us to do things 全体が関係詞節という読み方しかありえないと思った人は、少し頭を働かせて見よう。関係詞説は (which) it gives us までで、to do things は同じ the power にかかる不定詞の形容詞用法という読み方もできるのだ。その場合、the power to do things which it gives us という語順もありえるが、そうすると which it gives us の先行詞は the power ではなく、things だという解釈の余地も出てくることになる。同一の名詞に後ろから複数の修飾語句が付く場合、同じ関係詞節や to 不定詞、分詞同士であれば、and や but で繋がれる (区切られる) が、修飾語句の種類が違えば、接続詞が出てくることはない。また、句と節のどちらが先に来るといふ決まりもない。

今回の例文では、何通りかの読み方ができるのはやむをえない。文脈から自ずと読み方が特定されるケースではないからだ。さらに言えば、to do things を the power にかかる不定詞と考えた場合でも、(for us) to do things と (for it=science) to do things という二通りの読み方ができる。つまり to do things の意味上の主語は目的語の us なのか 主語の science なのかということである。

※なお、(for us) or (for science) という表記は意味上の主語という概念を表すための便宜上のものであり、実際の表記に表れるのは二つ下の次の段落に書いた this power of science to do things であることを念のため注記しておく。

ところが、意外なところに簡単な決着のヒントが与えられていた。次の段落の Now this power to do things carries with it no instructions である。これを見てはじめて、筆者が this power (for science) to do things の意味で用いていたことが明らかになる。これほど紛らわしい例にお目にかかることはめったにないと言ってよいだろう。

[補足] さらに正確を期すれば、to do things の主語に当たるのは「科学」であっても、その力が「私たち人間」に与えられるのであるから、実際に物事を行なうのは「私たち人間」である。したがって「科学が、物事を行なうために私たちに与えてくれる力」という訳は必ずしも間違いではないはずだが、(その場合 to do things は副詞用法の「目的」ということになるが)、段落の後の this power to do things は明らかに this power of science to do things であり、下記の訳が正しいことになる。しかし、その「科学の力」を借りて実際に物事を行なうのはあくまでも「私たち人間」であることに変わりはない。この解釈を難しくしているのは、言葉の表現上の意味とその内包する意味の違いである。人間の思考を反映する言語表現の多様性と曖昧さが見事に(?) 現れた例であると言ってよいだろう。

[全文和訳]

科学とは何か。この言葉はふつう三つのことのうちの一つ、またはその三つが混ざり合ったものを意味するために用いられる。科学は、ときには物事を発見する特別な方法を指す。ときには発見から生じる一連の [多くの] 知識を意味する。最後に、科学という言葉は、そうした発見から生まれるすべての新しい能力や方法を表すために用いられる。この最後の分野はふつうテクノロジー (科学技術) と呼ばれる。しかし新聞や雑誌の科学欄を見れば、理論的研究の進歩とその実用化 [実際の応用] がちょうど同じくらいの注目を受けていることがわかる。

このことは驚くにあたらない。なぜなら、科学の最も明白な特徴はその有用性、(つまり) 科学が私たちに与えてくれる、物事を行なう力だからである。そのめざましい一例が産業革命であり、(というのも) もし科学の発展がなかったなら、産業革命はきっとありえなかっただろう。病気の蔓延を防ぎ、著しく増大した世界の人口に十分なだけの大量の食糧を生産し、そして奴隷労働に頼ることなく [奴隷労働という手段に訴えることなく] 十分な生産を達成する人間の能力は、科学技術上の専門知識の発展を反映している。

ところで、物事を行なうこの力は、それをいかに利用するか、善用するかそれとも悪用するかについての指示 [使用説明書] をまったく持ち合わせていないのである。こうしたことはもっぱら、発明されたものがどのように使われるかによって、また私たち自身が何を優先するかによって決まるのである。そうになると、たいていの人たちが矛盾した感情を抱くのは、もっともなことである。

(1) The Japanese civilization is not very old when compared with those of Egypt or China, but the manner in which it has nourished and preserved the traditions from antiquity has made it older than most. The country's relative isolation from the rest of the world for long centuries led the people to concentrate on those values and patterns of conduct which they felt to be most vital in their frequent struggles with nature and geography. (2) The Japanese learned from the earliest times the importance of hard work and loyalty to a group or a larger task in their efforts to scratch a living from a frequently none too fertile soil. They also came to believe that they were a nation set apart and unique, and this gave them a feeling that they possessed a special destiny. (3) An examination of Japan's past can quickly help us to see many dynamic factors that made it the world's second greatest industrial and economic power, factors that lie rooted in an ancient past and continue, even today's information age, to be unconsciously nurtured. (Partly adapted.)

※読み下げは速読の方法として大いに結構だし、英語を英語として読むのも結構だが、書き言葉の外国語を語順が根本的に違う別の言語に移しかえるとき、異なる言語の表現をどれだけ正確に理解しているかが明らかになる。英語から日本語への言い換えの場合だけ、訳し下げなるものが常に通用すると考えるほうがどうかしているだろう。

[全訳]

(1) 日本の文明は、エジプトや中国の文明と比べるとそれほど古くはない。しかし大昔からの伝統を育み保存してきたやり方のゆえに、(日本の文明は)たいていの文明よりも古い。日本は何世紀もの間、他の国々から比較的孤立していたために、国民は、自然や地勢と頻繁に闘う際に最も重要であると思う価値や行動様式に専念するようになった。(2) 日本人は、しばしば少しも肥沃ではない土地からなんとか生活の糧を得ようと努力する際に、勤勉の大切さと、集団あるいはより大きな仕事に対する忠誠の大切さを大昔から学んでいたのである。日本人また、自分たちは他と切り離された独特の国民であると信じるようになり、そのために、自分たちは特別な運命を担っていると感じるようになった。(3) 日本の過去を検討すれば、日本を世界第二位の工業・経済大国にした多くの力強い要因はすぐにわかるが、そうした要因は古い過去に根差していて、しかも今日の情報化時代においてすら、いまなお無意識のうちに育まれているのである。

(1) those=the civilizations 以外に解釈の余地はないが、本来は前出名詞が単数の場合は that、複数の場合は those を用いることになっている。この場合は後ろに付く修飾語も Egypt or China であり、that を用いるべきである。

(2) scratch a living 「なんとか生計を立てる」は scratch 「ひっかく、こすり取る」と make[earn] a living から見当を付ける。

The automobile, at least as much as anything else, has made American society what it is today. It has had its influence on every phase of American life, from the development of cities to teenage morals. It was the automobile which forced the construction of a great network of superhighways. More profoundly, the car industry has helped, by its rapid ups and downs, to establish a cycle of boom and slump in the economy.

[全訳]

自動車は、少なくとも他のいかなるものにも劣らず、アメリカの社会を今日の姿[状態]にしてきた。自動車は、都市の発展から10代の少年少女の道徳[素行]にいたるまで、アメリカ人の生活のあらゆる面にその影響を及ぼしてきた。一大高速道路網の建設を余儀なくしたのは自動車だった。もっと重要な意味においては、自動車産業が、業績の目まぐるしい浮き沈みによって、アメリカ経済の好況と不況の周期を決めるのに一役買ってきた(のである)。

We have been inclined, in our wild industrial development, to forget that agriculture is the base of our whole economy and that in the economic structure of the nation it is always the cornerstone. It has always been so throughout history and it will continue to be so until there are no more men on this earth.
※ It と so の内容がわかるように訳すこと。

[全訳]

工業が猛烈な勢いで発達するなかで、私たちはこれまで忘れる傾向にあったが、農業は経済全体の基礎であり、そして一国の経済構造において農業は常に礎石[礎(いしずえ)]である。農業は歴史を通じて常に経済全体の基礎であり、一国の経済構造において礎石であったし、この地球上にもはや人間がいなくなるまで、そうであり続けるだろう。

*no more≒no longer

*cornerstone は base と差を付けて「土台、最も重要な部分」くらいに訳せば十分

Pavlov's principle is this: Given a reflex according to which a stimulus B produces a reaction C, and given that a certain animal has frequently experienced a stimulus A at the same time as B, it often happens that in time the stimulus A will produce the reaction C even when B is absent. To determine the circumstances under which this happens is a matter of experiment. Clearly, if we substitute ideas for A, B, and C, Pavlov's principle becomes that of the association of ideas.

[全訳] パヴロウの原理とはこうである。ある反射作用があって、それに従って刺激 B が反応 C を生むとすれば [刺激 B が反応 C を生む反射作用があるとすれば], そしてある動物がしばしば刺激 B と同時に刺激 A を経験しているとすれば, やがて, 刺激 B がない場合でも刺激 A が反応 C を生むということがよく起こる。どういう状況でこうしたことが起こるのかを [こうしたことが起こる状況を] 確定するのは実験の問題である。もし A, B, C を観念に置き換えれば, パヴロウの原理が観念の連想 [観念連合] の原理となることは明らかである。

*一行目 Given ~ = 接続詞 If [when] に当たる受け身の分詞構文が慣用表現化したもの

*二行目 given (that) ... = この場合は, 結果的に given (that) が if に相当する cf. supposing ... = if ...

The feelings of adult individuals are a product of many causes: experiences in infancy; education; economic struggles; and success or frustration in private relations. Men, on the average, will be kindly or hostile in their feelings towards each other in proportion as they feel their lives successful or unsuccessful. This of course does not apply to everybody. There are saints who can endure misfortune without becoming embittered and there are fierce men whom no success will soften.

※ This の内容がわかるように訳すこと。

[全訳] 個々の大人の感情は, 多くの原因の産物である。幼児期の経験, 教育, 経済的な苦勞, そして個人的な関係がうまく行っているか, うまく行っていないかといったことである。平均すると, 人間は, 自分の人生を成功と感じるか, それとも失敗と感じるかに比例して, お互いに対する感情が優しくなったり, とげとげしく [敵対的に] なったりする。自分の人生を成功と感じるか, それとも失敗と感じるかに比例して, 人のお互いに対する感情が優しくなったり, とげとげしくなったりすることは, もちろん誰にでも当てはまるわけではない。敵意を抱かずに不幸に耐えられる聖人もいるし, どんなに成功しても気持ちの優しくならない荒々しい [気性の激しい] 人間もいる。

*in proportion as ... = according as... = as...

*fierce men whom no success will soften

=fierce men who will not be softened however successful they may be

Very early in our childhood we are taught that you can't have your cake and eat it, and (1) this is only putting in another way the fact that you can't use the same resources to produce two separate things at the same time. If you want to grow cabbages on a bit of land you cannot also use it for a tennis court. (2) You have to choose which of the many possible uses to which you could put the same materials or the same time is the one you prefer, in the knowledge that the price you pay consists of all the other alternatives you have thereby given up.

※ (1) this の内容がわかるように訳すこと。

[全訳]

私たちはごく幼い時に、お菓子は食べればなくなることを教えられるが、(1) お菓子は食べればなくなるということは、同じ資源を使って同時に二つの別なものを作り出すことはできないという事実の言い換えにすぎない。もし一片の土地にキャベツを育てたければ、その土地をテニスコートとしても使うことはできない。(2) 同じ材料あるいは同じ時間を当てるのが可能な多くの用途のうち、どの用途を選ぶかを決めなければならないが、その際、自分が支払う代償は、ある用途を選ぶことによって放棄した他のすべての選択肢から成ることを承知の上でなければならない。

* 上記の下線部訳は日本語の表現を重視した場合の解答例であり、以下に別解答例を提示する。

(1) お菓子は食べればなくなるということは、同じ資源を使って同時に二つの別なものを作り出すことはできないという事実を別の言い方で表現したにすぎない。

(2) 同じ材料あるいは同じ時間を使うのが可能な多くの用途のうち、どれが自分の好む用途であるかを決めなければならないが、その際、自分が支払う代償は、そうすることによって放棄した他のすべての選択肢で構成されていることを承知していなければならない。

* 下線部(2)の助動詞(相当語句) have to は in the knowledge that ... 以下にも及ぶ。

* なお the many possible uses to which you could put the same materials or the same time ← you could put the same materials or the same time to the many possible uses (put ... to use) であることは見抜けているはずだ。

It is difficult, in a word, to be scientific about cause and effect in human affairs as we can be scientific about them in the material world. (1)For into our judgment of the first there enter emotions and prejudices from which we can never wholly free ourselves. They affect our selection of postulates, upon which our conclusions depend even when we believe ourselves objective in our analysis. (2)The facts, that is, come to us so coloured by the environment of which we are a part that the objectivity we largely secure in chemistry or physics is unattainable in the world of human affairs.

[全訳]

要するに、物質的な世界において原因と結果を科学的に扱うことができるのと同様に [できるのと(は)異なり], 人間的な事柄において原因と結果を科学的に扱うのは難しい。(1)なぜなら、人間的な事柄に対する判断には、私たちがけっして完全には免れることのできない感情や先入観が入り込むからである。感情や先入観は前提条件の選択に影響を及ぼすが、自分の分析は客観的だと信じている場合ですらも、そうした選択に私たちは結論を左右される。(2)つまり、諸々の事実は、私たちに知られるとき、私たちもその一部である環境によって著しく潤色されているので、化学や物理学において概ね確保されている客観性は、人間的な事柄の世界においては達成できないのである。

*今回は下線部外だが、第一センテンスの as は日本語に訳しにくい。いわゆる状態の as 「ように、とおりに」だが、主節が否定文の場合、そのまま訳すと意味が不明になる。

He did not do it as he was told. 「彼はそれを言われた通りに [ように] やらなかった」は、He did not do it as he was told to do it. の意味なのか、He did not do it as he was told not to do it. の意味なのか判然としない。前者の場合には、「彼はそれを言われた通りに [ように] はやらなかった」と「は」を補うことで一応の区別がつくが、

本文のように、「は」を補うとかえって判りにくくなる場合には、「... と(は)異なり / ... と(は)違って」と思い切って意識するのが一つの手である。

*下線部(1) For を前置詞と取り違えないことが大前提。

into our judgment of the first (there) enter emotions and prejudices

← emotions and prejudices enter into our judgment of the first

(広義の)場所・方向の副詞句+完全自動詞+(不特定の)主語 の倒置である。上級重要英語構文「倒置」参照。

*下線部(2) that is (to say) が文頭に位置しないのは珍しいが、これさえ見誤らなければ、構文的には平易なので、日本語の表現力が問われることになる。提示した訳文はあくまでも解答例である。

*下線部間のセンテンスの別の訳例：

自分の分析は客観的だと信じている場合でさえも私たちの結論を左右する前提条件の選択に、感情や先入観が影響を及ぼす。

When you begin a particular conversation, you undoubtedly have certain expectations about it. (1) It is very unlikely indeed that you see somebody — anybody — and just open your mouth and let your words spill out as they happen to come. It may be the case that some people do behave this way, but we soon learn not to pay much attention to what we hear from them, as it is not likely to be very important. In contrast, you almost certainly will have a number of assumptions about what kind of conversation you are likely to be embarking on and what kinds of matters will be “proper” within it. But, of course, your assumptions may well need to be changed as a particular conversation progresses and as various topics are introduced and treated within it. Nevertheless, if the conversation is to be perceived as a genuine interchange, it must sound right; an emotional reaction must seem genuine; a question or a request must appear properly motivated. (2) While it may often be difficult, if not impossible, to explain exactly how speakers create this feeling of genuineness, most of us find its absence rather easy to detect. We also know that while some people never seem to experience any difficulty in persuading others to trust their words and deeds, others rarely succeed in doing so.

[全訳] 人が特定の会話を始めるとき、その会話についてある予想を立てていることは間違いない。(1) 人が誰かに会って、それが誰であろうと、ただ口を開いて、言葉がたまたま浮かんで [出て] くるままに口からこぼれ出るにまかせるというようなことは、まずほとんどありそうもない。 実際にこのような振る舞いをする人も事実いるかもしれないが、そういう人から聞かされる話はたいして重要ではなさそうなので、私たちはすぐに、そうした話にはあまり注意を払わないようになる。対照的に、人は自分がどんな会話をするかになりそうか、またその会話においてはどんな事柄が「適切」であるかについて、きっとあれこれ想定してみるだろう。しかし、もちろん、こうした想定は、特定の [実際の] 会話が進むにつれて、またそこに様々な話題が持ち出されて話し合われるにつれて、おそらく変える必要が生じてくるだろう。にもかかわらず、会話が心のこもったやりとりだと分かってもらうためには、会話が適切だと思われることが必要である。つまり感情的な反応は偽りのないものと思われることが必要だし、質問や要望は動機が妥当だと思われることが必要である。(2) こうした心がこもっているという印象 [感じ] を話し手がどうやって作り出すのかを正確に説明することは、不可能ではないにしても、難しい場合が多いかもしれないが、こうした印象 [感じ] が欠けていることはたいていの人がかなり容易に見抜いてしまう。 また、他人を説得して自分の言動を信じさせるのにまったく苦労しないように思われる人もいるのに、それがめったにうまくいかない人がいることもわかっている。

* 下線部には難しい単語は一つもないが、(2) の most of us find its absence rather easy to detect 「... が欠けていることは見抜くのにかなり容易だと思う」は → most of us find it rather easy to detect its absence → most of us find that it is rather easy to detect its absence くらいの言い換えは必要である。

* 下線部外では、4行目の the case=a situation that exists 「実情, 真相」, 9行目の may well=it is fairly likely, 10行目の if the conversation is to be perceived as ... は if節中の be+to不定詞「意図, 目的」である。

The great promise of unlimited progress — the promise of domination of nature, of material abundance, of the greatest happiness for the greatest number, and of unrestricted personal freedom — has sustained the hopes and faith of the generations since the beginning of the industrial age. To be sure, our civilization began when the human race started to take active control of nature; but that control remained limited until the advent of the industrial age. (1)With industrial progress, from the substitution of mechanical and then nuclear energy for animal and human energy to the substitution of the computer for the human mind, we could feel that we were on our way to unlimited production and, hence, unlimited consumption; that technique made us all-powerful; that science made us all-knowing. We were on our way to becoming gods, supreme beings who could create a second world, using the natural world only as building blocks for our new creation.

Men and, increasingly, women experienced a new sense of freedom; they became masters of their own lives: feudal chains had been broken and one could do what one wished, free of every restraint. Or so people felt. And even though this was true only for the upper and middle classes, their achievement could lead others to the faith that eventually the new freedom could be extended to all members of society, provided industrialization kept up its pace. Socialism and communism quickly changed from a movement whose aim was a new society and a new man into one whose ideal was a bourgeois life for all, the universalized bourgeois as the men and women of the future. (2)The achievement of wealth and comfort for all was supposed to result in The achievement of wealth and comfort for all was supposed to result in unrestricted happiness for all. The trinity of unlimited production, absolute freedom, and unrestricted happiness formed the nucleus of a new religion, Progress, and a new Earthly City of Progress was to replace the City of God. It is not at all astonishing that this new religion provided its believers with energy, vitality, and hope.

※区切りの60題目に相応しい、今ではほぼ入試の下線部和訳の上限と言ってよい問題を提示したが、内容はまさに今の時代にこそ相応しい。構文・語句と内容の補足は近日、行なうが、自信のある難関大学受験生はまず自力で取り組んでみて欲しい。

[全訳] 無限の進歩の大いなる見込みが----つまり自然に対する支配, 物質的豊かさ, 最大多数の最大幸福, そして限らない個人の自由の見込みが----産業化時代が始まって以来の幾世代もの希望と信念を支えてきた。なるほど, 我々の文明は人類が積極的に自然を支配するようになったときに始まった。しかし, そうした支配は産業化時代の到来までは限られたものであった。(1)動物や人間のエネルギーの代わりに機械さらには核のエネルギーを用いたことから, 人間の頭脳の代わりにコンピュータを用いたことに至るまで, 産業の進歩と共に, 我々は無限の生産と, したがって無限の消費への道を歩んでいる, (つまり)技術は我々を全能にする, 科学は我々を全知にする, と感じる事ができた。我々は, 自然界を新たな創造のための単なる建築材料として用い, もうひとつの世界を創造することができる至高の存在, つまり神になる道を歩んでいた。

男たちそして次第に女たちも、新しい自由の意識を経験した。男女とも自分の人生の主人公となった。封建的な鎖はすでに断ち切れ、人はあらゆる制約なしに自分の望むことをすることができた。あるいはそう感じたのだ。そしてこのことは上流階級と中流階級にだけ当てはまることであったにしても、彼らが新しい自由を達成したことによって、他の階級の人間たちも、産業化がこのまま道めば、ゆくゆくは新しい自由は社会のすべての成員にまで及ぶことが可能だと信じるようになった。社会主義と共産主義は、新しい社会と新しい人間を目標とする運動から、万人がブルジョワ[有産階級]的生活を送ること、つまり未来の人間として誰もがブルジョワになることを理想とする運動へと急速に変化した。(2) 万人のための富と安楽を達成することは、万人のための無限の幸福をもたらすと思われていた。無限の生産と完全な自由と限らない幸福という三つの組み合わせ[三位一体]が「進歩」という新しい宗教の核となり、新しい地上の[この世の/世俗的な]進歩の都市が神の都市に取って代わることになった。この新しい宗教が信者たちにエネルギーと活力と希望を与えたことは少しも驚くに当たらない。

- ・ 下線部以前では、同格の of, 目的関係の of, 主格関係の of (the advent of the industrial age) が多用されているが、これは見抜けたはずである。
- ・ 3行目の has sustained the hopes and faith of the generations since ... の since 以下を the generations にかかる形容詞句で訳したのは、the generations という定冠詞の存在を重視したからである。
- ・ 下線部(1)に出てくる the substitution of A for B の of はもちろん目的格関係を表し、substitute A for B を名詞化したものである。
- ・ 最大のポイントは二度出てくる ; that ... の正確な解釈である。we could feel の目的語であることは言うまでもないが、カンマと異なり、セミコロンによる補足
- ・ 詳述の形をとっているので、完全な同格(言い換え)とは微妙に異なる。今の大学入試がこの辺まで採点基準に含めているかどうかは何とも言えないが、「そして」を補って訳すのは避けるべきだろう。
- ・ 下線部下の gods と supreme beings は完全な言い換えだが、後ろから先に訳したのは、supreme beings に分詞構文つきの関係節が付いているために、were on our way to becoming という述語動詞に関わる部分を最後に訳すと、非常に読みづらい日本語になるからだ。これを避けるには、「我々は、神になる道を歩んでいた、つまり自然界を新たな創造のための単なる建築材料として用い、もうひとつの世界を創造することができる至高の存在になる道を歩んでいたのだ」と were on our way to becoming を二度訳すという方法がある。英語力と同時に日本語の力に自信のある人は身に付けておいて損はない。
- ・ 第二段落一行目の increasingly を「ますます」と訳すとおかしい意味になる。
- ・ 四行目の their achievement = the upper and middle classes' achievement of the
- ・ new freedom 五行目の others = other classes
- ・ 六行目の provided [providing] ... は実質的に if ... に相当する元は分詞構文だが、仮定法には用いない
- ・ 下線部(2)の The achievement of wealth and comfort for all was supposed to result in ... は、主語が二人称で現在の場合の be supposed to V 「... するこ

とになっている、--すべきである(軽い命令)」と異なり、物事が期待通りに進展しない(しなかった)こと含意することがある。

- ・ a new religion と Progress の同格を掴めなければ、この下線部和訳は大きく崩れてしまう。
- ・ a new Earthly City of Progress was to replace the City of God は be to V の「運命」と解することができる。

※ソ連の共産主義という社会科学の壮大な実験が失敗に終わり、対抗価値を失った資本主義はひとり勝利を手中に収めたかに見えたが、今や米国を中心とする既存の資本主義経済も著しい経済格差の拡大と高い失業率により崩壊の危機に瀕している。一方、中国は一党独裁による上からの市場経済化(資本主義化)により共産主義を実現するというパラドキシカルな道を歩んでいるが、先行きはまったく予断を許さない。世界秩序と国内秩序を再構築することは焦眉の急であり、いま世界は歴史的な大転換点に差しかかっていることは間違いない。すでに多くの国々で偏狭なナショナリズムと排外主義が台頭し、20世紀に続き、21世紀が戦争と内戦の世紀となる虞れもある。既存の価値を打ち破る大胆な構想と枠組みの創出が強く求められる。その役割を一義的に負うのが大学に籍を置く研究者ではないだろうか。日暮れて道遠しだが、無能な大学教官によってスポイルされる学生こそまさに被害者である。

※無能な大学教官と言うと、過激に聞こえるかもしれないが、インターネットで「無能な大学教官」を検索すれば、例はいくらでも出てくる。またマスコミや動画に登場する自称学者・研究者たちの言説の大半(すべてではない)は研究者の名に値しない。いわゆる一流大学とて例外ではない。